
扉を開けると包丁を持った男がいた

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉を開けると包丁を持った男がいた

【Nコード】

N2262S

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

玄関の扉を開けると包丁を持った男がいた。やばい。

俺は家でごろごろしていた。

自分の部屋で漫画を読み、読み終わればゲームをし、飽きれば昨日の晩御飯の残りをつまみ食う。

ベランダに出てひなたぼっこをし、そこで読書をしたりなんかもしていた。

久しぶりにバイトが無い日。しかも休日。大学はもちろん無い。

こんな日は家でごろごろするのが一番で、現に今その真つ最中だ。ただやはり大学やバイトなど、日がな動き回っている俺にとつてはこのゆっくりと流れる平和な一日に馴染みないせいか、妙にそわそわする。

しばらくせわしなく読書やゲーム、洗濯物たたみなどをローテーションしている、玄関のインターフォンが鳴った。

俺の住んでいる場所はマンションだ。9階建てのマンションの6階。

マンションの入り口にはオートロックがあり、部外者はそのインターフォンを鳴らす。

玄関の前にもインターフォンがあり、そこが鳴ったということはこのマンションの者である可能性が高い。

俺はそのことに少しげんなりした。

こんな、隣の住民が誰かも分からぬ程人と人との無関心な都会で、わざわざ来る人間といえば、宗教絡みや選挙絡みでしかない。

この頃引っ越してきた人間もいないから、ほぼ確実にそうだろう。

家の中には俺一人しかいない。

居留守を決め込むか、と考えていると、またインターフォンが鳴った。

流石にそれはダメか。近所で悪い噂とか広まるのもイヤだしな。そう思い、俺は乗り気も無く玄関に近寄った。覗き穴を覗き込むと、誰もいなかった。

いや、いるのだろうか、インターフォンの位置にいられると見えないのだ。

玄関の扉の横に、仕切るように白い区切り柵がある。その柵の横、扉の真横にインターフォンが設置された柱があり、そこにいられると見えないのだ。

俺はめんどくせえー、誰だよと思いながら扉にチェーンをかけて開いた。

ガチャツと扉を開く。

白い柵の向こうに、包丁を持った男がいた。

ガチャツと扉を閉めた。

「……………」

もう一度ガチャツと開けてみた。

包丁を持った男が柵の扉を開けていた。

ガチャツと閉めてついでに鍵もかけた。

鍵をかけた瞬間扉の把手がガチャガチャと暴れ狂った。

「うおおっ！」

うわーやべえ！　ありえねえ！

心臓がばくばくと鳴る。

やばかった。すごくやばかった。

咄嗟に鍵をかけなかったら、扉が開かれていた。

扉が開いたら、あんな心許ないチェーンなどすぐに壊されてしま
うだろう。

俺はガチャガチャとなる扉の、二つある鍵を二つともかけた。

これで大丈夫。これで大丈夫なはずだ！

非日常的な光景に、冷や汗が流れ、足が震える。

息も苦しくなってきた。怖い。

扉を凝視していると、やっと静かになった。

俺は恐る恐る覗き穴を覗き込む。

そこには不服そうな顔をしたさっきの男がいた。

俺は悲鳴をあげて自分の部屋に逃げ込んだ。

頭から布団を被り、情けなく震えながら早くどっか行ってくれ早
くどっか行ってくれと願う。

なんなんだよあいつ、ホントなんなんだよあいつ！

見たことがない奴だった。

ご近所付き合いなんかしない俺だから、それは当たり前のことな
のかもしれないが、もしあの男がこのマンションの人間だったら…
…。

血の気が引く。なにそれ怖い。

俺はベッドの中、さきほどの騒がしさが嘘のように静まり返った
扉に、逆に恐怖心を煽られずと震えていた。

そして、そのままいつの間にか寝てしまっていたようだ。

俺を起こしたのは施錠を外す音と、ガチャン、というチェーンの
音だった。

びくん、と意識が覚醒する。

やばい、もしかしてあの包丁男が。

「こらー！ 何してんのー！ チェーン外しなさい！」

母親の声だった。

俺は安心して玄関に向かった。

眉を怒り気味に上げた母親に謝りながらチェーンを外す。

「なんでチェーンかけてんのよ」

「いや……ちょっと……。それより、玄関の前に誰かいなかった？」

「誰って、誰？ そんなのいなかったわよ」

「そっか……」

まあ当たり前か。いたら母親が刺されてるもんな。

俺は玄関の鍵を閉めた。その日はそれから何も起きなかった。

数日後の朝。俺は大学に行くがてらにゴミ出しを頼まれた。

めんどくさかったがまあいいやと思い、家から出る。

近くのごみ捨て場に袋を置き、肩にかけたリュックを背負いなお

す。朝の気持ちの良い日差しに軽く伸びをすると、そいつと目が合った。

忘れもしない。包丁を持って扉をガチャガチャした男だ。

男はごみ袋を持ってマンションから出てきたようだ。

両者共、ハツとした顔をした。

俺は逃げた。

包丁男は追いかけた。

男の持っていたごみ袋がガサガサ鳴って大変うるさかった。

途中、ごみ袋が投げられ、危うく当たるところだったが俺は華麗に避けた。ただ道を曲がっただけとも言う。

大丈夫、大丈夫だ。俺は元陸上部。大丈夫だ、大丈夫だ！

必死に包丁改めごみ袋を持った男から逃げ、駅に着いた頃にはごみ袋男は俺を追ってこなかった。

俺は勝利に自信の笑みを浮かべ、横を通り過ぎたＯＬに「きゃっ」と言われた。

……なんだか虚しかった。

数日後の午後過ぎ。

俺は友人と二人で駅近くのファミレスで話をしていた。

野郎二人、色気もへったくれもないがまあ仕方ない。

俺らはそれなりに楽しい会話を繰り広げていた。

注文していたハンバーグが俺の前に置かれる。ジュージューとなんとも美味しそうに鳴るハンバーグに俺は嬉々として手を合わせた。

「いただきます！」と喜色満面でフォークとナイフを持ち、いざ尋常に！

その時ふと横目でガラス張りの外を見た。
そして俺は固まる。あの包丁、いやごみ袋を持っていた男がガラスに向かつて髪の毛を整えていたからだ。

しばらくの間その姿勢のまま固まり、そして男が鏡ではなくガラス張りだったということに気付いて慌てふためいた時、目が合った。

両者共、ハツとした。

俺はテーブルを叩き勢いよく立ちあがった。

男はファミレスの入り口を探し目を彷徨わせた。

俺は走る。男も走る。

頭上から見下げると口の字型に並んでいるテーブル席の、比較的入り口付近、無人のテーブルの下に俺は隠れた。

その瞬間けたたましい鈴と扉の開く音が響く。間一髪だ。

男がダダと俺が座っていた席に行く。俺は入り口に向かって走る。

男がそれに気付き俺を追った。だがその時すでに外に出ていた俺に勝てるはずがない！

俺は全力で一つ先の駅まで走り、さすがにここまでは追ってこないだろうとあたりをつけて立ち止まる。ぜえはあと息をつく中友人に謝りのメールをいれた。

携帯を握り締めながら、俺は勝利にふひひと笑った。

ちやらい男に「うわっ」とびびられた。

俺は無敵だった。

数週間後。

俺は一人で道を歩いていた。大学に行くために電車に乗り、降りた後数分歩く。

家の近くではないし、この頃あの男とも会わないので俺は大丈夫だろうとタカをくくっていた。

だが、世の中はおかしいものだ。前から歩いてくる、ガラスに向かって恥ずかしくも髪の毛を整えていた男とエンカウントした。

両者共、ハツとした。だが、男はすぐに追っかけてこない。

冷や汗が流れた。なんだか男が前よりも筋肉質になっているような気がする。

ま、まさか俺を追っかけるためにトレーニングをしたのか？ ば、

馬鹿な！ いや違う、馬鹿だ！

俺は恐怖に慄き、何故か往來で屈伸を始めた男を見ていた。

男がクラウチングスタートのポーズを取る。

俺は逃げた。男は追いかけた。

「うおっうおっうおおおおおっ!？」

男は速かった。この前と比較にならないほど速かった。

馬鹿だ。馬鹿だが、やばい！

だ、だが俺は元陸上部！

30人いる部内でも15番目の速さを持つ男だ！ ああやばい微妙すぎる！

俺は死に物狂いで走り、結局付け焼刃のトレーニングよりも三年間真面目にトレーニングを積んでいた俺には勝てなかったようだ。

俺はその日大学をさぼり、家に帰った。

ベッドに入り、俺は今日あったことを思い返して「やっぱ俺って最強だ」と自信の笑みで天井を見上げていたのだった。

その数日後。

いつも通り大学に行くため俺は駅に向かって歩いていた。

そして俺はハツとする。

後ろからバタバタと走る音が聞こえたからだ。

俺は振り返る。なんと、そこには両手を変な風に構えた男が走ってきていた！

幽霊のうらめしや、というあの有名なポーズだ。その腕の高さが顔の位置にある！ ああやばい！ なんか知らんが妙に怖い！

そして男が前とは比べものにならないほど筋肉マッチョになっている！ 命の危機が危ない！ 何言ってんだ俺！

俺は全力で逃げた。

だが、俺は気付くの遅すぎたのだ。

俺は男に背後からタックルされ、「うばぁーっ！」という咄嗟にもれた声と共に地面に倒される。

ズサアツと男が男に抱きついた、そんな不名誉な体勢で倒されたのだ。

肝が冷える。

初めて男と会った時、包丁を持っていたのを思い出したからだ。俺は抵抗するように暴れた。

男二人がもみ合う中、俺はなんとか仰向けになったが、マウントポジションを取られてしまった。

「ま、待てっ！ 待てっ！ ウェイト！ てかシャラップ！」

男はそんなことを言いながらビンタしてきた。痛かった。
あまりのことに俺は暴れるのを止めた。

男は俺が諦めたようにぐったりしているのを確認した後、俺から
退く。

俺はのっそりと身体を起こし、男に向き直った。

殴ってやろうと拳を握った瞬間、目の前に右手が差し出される。

俺は何がなんだか分からずその手と男の顔を交互に見た。

男は自信に満ちた顔で俺に右手を差し出しているのだ。

俺は理解した。

フツ、とアメリカの映画で出てくる俳優が取る、気障な笑みを浮かべ、握手を交わした。

「お前の走り……見事なもんだ」

「ハッ……。俺は高校の陸上部で、30人いる中15番目に速かった男だぜ……」

「微妙だな……」

「よせやい。照れるじゃねえか」

両者共、何かをやり遂げた顔で会話した後、携帯のアドレスを交換し合うのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2262s/>

扉を開けると包丁を持った男がいた

2011年4月5日18時10分発行